

第 322 回研究報告会（6月6日）

WCRP 日本委員会平和研究所の活動について

金子 昭

私は 2016 年 9 月より、学長室からの派遣という形で、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会平和研究所の所員として務めている。今日に至るまで、毎月の定例会議及び研究会を含め、平和大学講座、韓国 IPCR（宗教平和国際事業団）国際セミナーなどに出席し、宗教間対話の研究及び実践に微力ながら携わってきた。今回の研究報告会では、WCRP 日本委員会及び同委員会研究所の活動について報告した。

1. WCRP 日本委員会とは

1970 年 10 月、京都で第 1 回世界宗教者平和会議 World Conference of Religions for Peace（平和をめざす宗教の世界会議）が開催された。WCRP とはこの会議名から来ている。この会議には、世界宗教 39 개국から約 300 名が参加したが、以後、5 年おきに世界大会を開催している。本年 2019 年 8 月、Caring for Our Common Future（慈しみの実践—共通の未来のために—）をテーマに、ドイツのリンダウで第 10 回世界大会の開催を予定している。現在、WCRP 日本委員会平和研究所では、この世界大会に向けて日本からの提言を検討中である。

WCRP は、世界組織として WCRP 国際委員会があり、その下部組織として WCRP 各国委員会がある（WCRP 日本委員会もその一つ）。また、そのアジア組織として、ACRP（アジア宗教者平和会議）がある。日本委員会の正式名称は、公益財団法人世界宗教者平和会議日本委員会である。事務局は立正佼成会本部内にあり、事務局員もすべて同会から出向している。現在、会長（評議員議長）は庭野日鑑・立正佼成会会長、理事長は植松誠・日本聖公会首座主教、また本学の永尾教昭学長も理事として務めている。

この委員会の下に平和研究所が置かれ、現在、所長の山崎龍明・武蔵野大学名誉教授を含め 10 名の所員で構成されている。このほかにも、難民問題、核兵器禁止条約、気候変動、和解の教育などの特別事業部門（タスクフォース）、また青年部会や女性部会が設けられている。主な活動としては、① 諸宗教間対話・ネットワークを通じた宗教協力、② 啓発・提言活動、③ 平和教育・倫理教育、④ 人道的貢献、⑤ 女性部会・青年部会による宗教間交流があり、これら多方面にわたる活動を積極的に展開している。

2. 平和研究所の活動

WCRP 日本委員会平和研究所は、WCRP 日本委員会の目的及び事業の達成に資するため、宗教と平和に関する諸問題の調査、研究及び提言を行うことを目的として設置された。具体的な活動としては、① 月例の所員会議及び研究会、② 年 1 回の平和大学講座の開催、③ 韓国 IPCR 国際セミナーへの参加・協力、④ 機関誌『平和のための宗教—対話と協力—』の編集及び刊行などを行っている。

このうち平和大学講座は、一般の人々を対象とした、平和と宗教を考える公開講座である。昨年 3 月には、「他者と対話するとは何か—平和な社会の実現を目指して—」というテーマの下、天理大学ふるさと会館を会場に開催された。基調講演は

永尾教昭・天理大学長が行い、パネリストに間瀬啓允・慶應義塾大学名誉教授、そして平和研究所員でもある松井ケティ・清泉女子大学教授がそれぞれ務めた。また今年 3 月には、第 10 回 WCRP 世界大会のテーマでもある「慈しみの実践—共通の未来のための宗教者の役割を考える—」というテーマの下、大阪カテドラル聖マリア大聖堂を会場に開催された。このときの基調講演



『平和のための宗教』第 11 号

演は庭野光祥・立正佼成会次期会長が行い、パネリストは吉川まみ・上智大学准教授と、平和研究所員でもある森伸生・拓殖大学イスラーム研究所長が務め、コーディネーターは私（金子）が担当した。

3. 活動に関わっての所感

平和研究所に携わって 3 年目を迎え、宗教間対話の重要性と難しさを強く感じている。現代は対話の時代であり、宗教者らしい対話をこそ、宗教界の内外に向けて発信すべきであると思う。実際すでに、さまざまな宗教間組織でこうした対話が行われてきた。国内でも、日本宗教連盟、全日本仏教会、日本基督教連合会、新日本宗教団体連合会（新宗連）、教団付置研究所懇話会などがある。近年では、目的別の宗教間組織として、同和問題にとりくむ宗教教団連帯会議（同宗連）、宗教者災害支援連絡会、宗教・研究者エコイニシアティブなどの活動も盛んであり、教えの違いを超えて人権問題、災害支援、環境問題など実践的取り組みを行っている。こうした試みは、現場の問題に即した宗教者の交流や共働として、今後ますます重要な活動となって行くだろう。

また宗教間対話に関して言えば、国際的にも国内的にもかなり進展を見せているが、一つ難しさを感じたのは、日本・中国・韓国の宗教者による東アジアの宗教間対話についてである。国同士の冷え込んだ政治的關係がそのまま宗教間対話にも反映し、私が 2 回参加した韓国での IPCR セミナーでも、歴史認識をめぐる問題などをめぐって、各国のナショナリズムの主張と宗教者の立ち位置が強く問われた。日本人はどちらと言えば受身的なところがあるが、国際的には対決を通じてこそ真の対話も可能になるので、批判的意見でも積極的に出していくべきではないかと、自己反省も含めて考えさせられた。

なお先述したように、WCRP 日本委員会では創設以来、立正佼成会が教団として事務局を一手に引き受けている。各種の連絡調整、行事の運営、スタッフの派遣、参加者の動員、さらには相当の費用負担も行っている。しかも、これらはどこまでも「陰役」としての務めであり、立正佼成会の修行の一環だという。同会関係者の方々による、縁の下の力持ちとしての多大な尽力、またその謙虚な姿勢には、讃嘆を惜しまないと同時に、心から感謝を申し上げたい。